

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 芳賀 京子

本論文は、プリニウスをはじめとする古代の著作家がしばしば言及するロドス島の彫刻および彫刻家に関して、文献、碑文、彫刻などの資料に基づいてその実像を解明することを目的としている。ことに19世紀以来、『ラオコーン群像』などの考察からロドス派と称すべき彫刻流派の存在を主張する研究者に対して、そのような特質を有する彫刻流派をロドス島の彫刻および彫刻家には認められないとする近年の説との顕著な対比を、一次資料の網羅的な調査から再検討することにある。

このため、第1章〈古文獻のしるすロドス島に存在していた彫刻作品〉でリュシッポス作『太陽神』、カレス作『コロッソス』等を精査し、第2章〈ロドス人彫刻家の作品〉ではピュトクリトスらの彫刻家の活動を詳細にたどる。第3章〈ロドス島から出土した彫刻〉ではブロンズ、大理石、石灰岩など異なる材質ごとの彫刻を検討すると同時に、肖像や擬アルカイック様式の彫刻に検討を加える。第4章の〈ロドス島で活躍した外国人芸術家〉ではロドス島の経済的繁栄に魅せられて渡来した彫刻家をクラシック時代からヘレニズム時代まで、碑文を中心に新たな研究成果を提示している。第5章の〈ロドス島彫刻家〉では島に代々続いたアリストニダス一族やローマに移住したロドス人彫刻家の変遷を解明している。

以上の考察によって著者は、ロドス島におけるきわめて複雑な彫刻活動の推移を解明し、ロドス派と呼ぶべき彫刻流派が存在したことを否定すると同時に、紀元前4世紀から始まる経済的繁栄のなかでリュシッポスをはじめとする巨匠が渡来し、彼らの影響を受けながら紀元前200年頃から良質の彫刻が多数制作されたことを証明することに成功している。このきわめて困難な課題を研究するに当たり、碑文等の資料を徹底的に収集しており、そのような網羅的資料収集が困難な課題を解明する基礎となっている。

膨大な資料を用いるため論文全体としての論旨に明快さを欠くきらいはあるが、研究対象が内包する複雑さの故であることを考慮すれば、ヘレニズム彫刻史研究に新たな貢献を果たす論文と位置づけることが可能である。よって、審査委員会は本論文が博士(文学)の学位を授与するに値すると判定する。